

ベルリンの「平和の像」——突然の撤去への動きとその背景

池永記代美 (ベルリン・女の会)



2024年7月31日、ミッテ区議会のカム議長に住民請願を提出。最終的には3311筆の署名が集まり住民たちのアリに寄せる関心が高いことを実感した。(筆者撮影)

それはまさに青天の霹靂でした。2024年5月16日、「訪日中のベルリン市長が像の撤去を示唆した」とベルリンの地元紙から、「平和の像」を設置したベルリンの韓国系市民団体「コリア協議会」に連絡が入りました。

ベルリンの「平和の像」は2020年9月28日、ベルリン中心部に位置するミッテ区に「都市空間における芸術」として、1年の期限(1年延長可)で設置されました。ところが設置9日後、日本から直接・間接的に圧力を受けた区から撤去命令が出され、約2ヶ月後にはその撤去命令が撤回されるという様に、波乱含みのスタートでした(『wam だより』vol.46、vol.47 参照)。

それ以降も日本政府は像の撤去を働きかけ続けましたが、それは逆効果を招いたと言えます。日本の圧力に屈したミッテ区行政に対して同区議会は今春までに、像の恒久的設置や存続の保証を求める3つの動議を採択しました。区議会の決議に拘束力はありませんが、こうした動きを配慮して区は、3年目以降も設置を継続したいというコリア協議会の申請を審査することにし、その判断が出るまで像を容認することにしました。その結果、最長2年間しか設置できないはずの像が、3年半以上安泰でいられました。この間に「平和の像」はアルメニア語で「勇気ある人」を指す「アリ」という名を授かり、地元の人たちにも親しまれ、穏やかな街の風景の一部となりました。

そんな中で突然飛び出した冒頭のベルリン市長の発言に、アリの支援者たちは戸惑いました。コリア協議会が正式に撤去を伝えられたのは、2ヶ月後の7月19日に行われた区長との面談の場でした。「都市空間における芸術」では作品の設置期間は2年までと決まっている、恒久的設置には公募のプロセスが必要だ、現在の容認状態も違法だというのがその理由でした。区議会の関連文書を読めば、当初は区も像の設置継続を念頭に入れていたことがうかがえます。2021年8月時点では、並行して浮上した「性暴力を警告する普遍的な碑」の設置案は容易に実現しないので、「平和の像」の継続設置以外の選択肢はないという記述まであります。

ではいったい何故、事態が急転したのでしょうか。8月初め

に伝えられた内部告発に基づく地元の複数メディアの報道によると、ベルリン市の政権が昨年4月に中道左派3政党の連立から保守のキリスト教民主同盟率いる連立政権に代わったことを在独日本大使館が好機と捉え、相当の攻勢をかけたことがわかります。

例えば、コリア協議会は2021年から毎年、ベルリン市の文化教育財団の助成を受け、アリを利用した教育プロジェクトを行ってきました。ところが今春行われた審査会の冒頭で担当次官が、日本との関係悪化を防ぐためコリア協議会の申請を却下するよう市長から要請があったと語ったというのです。さらに、同じ内部告発では、日本大使館が複数の審査員を高級レストランに招待して申請に反対するよう依頼したことも報じています。日本大使館は接待についてはノーコメントでしたが、「教育プロジェクトは、アジアについて余り知識のない若者に反日感情を植え付けるものだ」と答えています。教育に国が介入しない仕組みができているドイツで、国の機関や組織が教育分野に介入したというのは前代未聞です。しかも、在独日本大使は、9月に行った講演で、自分の一つのミッションは像の問題を解決することで、ベルリン市長やミッテ区長には感謝しているが、ミッテ区の多数の議員の理解を得ることはできていないと語るなど、大使館の介入を自ら認めたのです。



「今の時代こそ、戦争の恐ろしさを可視化し、戦争が起こることを阻止すべきだ」と、コリア協議会の教育プロジェクトに参加した生徒たちが、区役所前での集会でプロジェクトの重要性を訴えた。(2024年9月19日、筆者撮影)

像撤去への動きに対し、アリの存続を支援する輪は瞬間に広がりました。機会あるごとに抗議集会が開かれ、区議会に住民請願を提出するために必要な1000筆の署名も2週間ほどで集まりました。9月19日の区議会ではこの住民請願と共に、像存続の可能性を求める新たな動議も採択されています。

一方、9月24日に行われた区長との2回目の面談でコリア協議会が私有地への移転を受け入れなかったため、区は10月31日までに像を撤去する旨、命令を出しました。それに対し、命令に対する異議申し立ての返答が区から得られなかったとして、コリア協議会は10月16日に行政裁判所に命令の差し止めを求める仮処分申請を行いました。裁判所の判断が出るまで、撤去命令の効力は停止されます。そのため、今もアリはいつもの場所に座り続けています。



例年ブランデンブルク門前で行われる「慰安婦」メモリアルデーの集会も今年はアリの周りで行われた。地元の住民、移民女性グループ、組合、政党など様々な人たちがそれぞれの立場からアリの存在意義を語った。(撮影：梶村太郎)